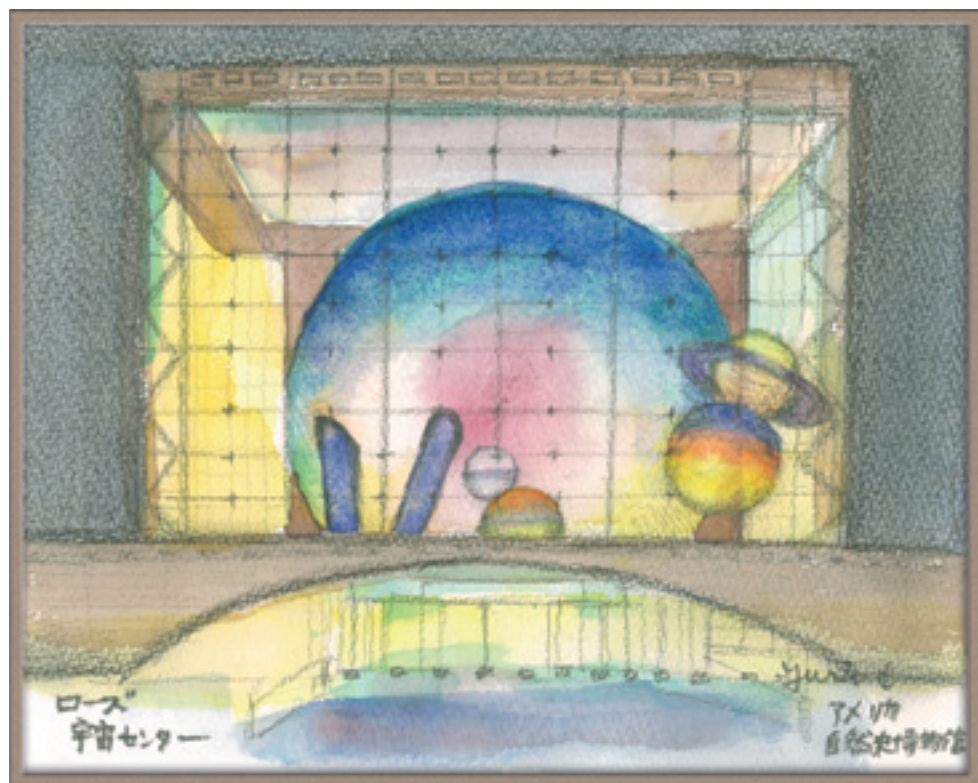


# 三河アララギ

平成二十四年

七月号

第五十九巻 第七号



## ニューヨーク日記(69) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

February 25, 2012 : Spiritual candles

### Blue Shoe Diaries



ラテン系のカルチャーではスピリチュアルな儀式は文化のうち。お願い事のおまじないやお守りの感覚は日本も一緒だよ。そんな儀式が出来るように道具や香りやロウソクが買えるところをボタニカって言います。マンハッタンではハーレムとかまで行かないとあまり見かけないタイプのお店。そんな分けてハーレム 行った時にボタニカを見つけました！中には不思議な物が沢山。それに数えきれないくらい色々な願い事に効くキャンドルが。何を願おうかね？

Have you been to a botanica? It's where you can find an array of spiritual/religious/mystical supplies. Like candles you burn to make you rich, find love, or remove a jinx. We went to one in Harlem! Think of a wish and it's likely you'll find a cologne, or a candle that will help you in obtaining that wish. I see this more like entertainment but some people seem to take it very seriously. We brought home a Virgen de Guadalupe candle. And no, none of the 'bring me love' stuff ☺

# 目次

## 第五十九卷第七号(通巻七〇三号)

|                      |               |                    |            |
|----------------------|---------------|--------------------|------------|
| 表紙 プラネタリウム           | 今泉 由利 (1)     | ガレキ                | 阿部 淑子 (27) |
| ニューヨーク日記(69)         | Blue Shoe (2) | 金環日食               | 富岡 和子 (27) |
| 感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」 | (4)           | 川面                 | 白井 信昭 (28) |
| 歌集「本の木」              | 杉浦 弘 (5)      | 現代学生百人一首           | 東洋大学 (28)  |
| 宵待草                  | 岡本八千代 (6)     | ことよせ               | いーはとぶ (29) |
| 奥多摩                  | 今泉 由利 (7)     | 私の一首               | 堀川 勝子 (30) |
| 日食メガネ                | 弓谷 久子 (8)     |                    | 胃甲 節子 (30) |
| 山里                   | 青木 玉枝 (9)     |                    | 伊藤八重子 (31) |
| 水芭蕉                  | 内藤 志げ (10)    |                    | 伊与田広子 (31) |
| 梨の花                  | 安藤 和代 (11)    |                    | 植村 公女 (32) |
| 名古屋城                 | 佐藤 喜仙 (12)    |                    | 一石 (32)    |
| この里よぎ里               | 林 伊佐子 (13)    |                    | 喜仙 (33)    |
| 蝸牛                   | 胃甲 節子 (14)    |                    | 皓一 (33)    |
| わがまま                 | 伊藤 忠男 (15)    | 贈呈誌 五月号            |            |
| 十葉                   | 半田うめ子 (16)    | 和歌から派生した季語の本意(最終回) |            |
| 花回廊                  | 金津 文枝 (17)    | ある自然科学者の手記(2)      | 大橋 望彦 (35) |
| 指揮                   | 伊与田広子 (18)    | 絹の話(20)            | 今泉 雅勝 (38) |
| 新芽                   | 清澤 範子 (19)    | 物理学者と詩歌の世界(30)     | 一石 (40)    |
| 五月の雨                 | 近藤 映子 (20)    | 短歌に詠まれた茂吉          | 鮫島 満 (42)  |
| この光                  | 杉浦恵美子 (21)    | 鬼怒川紀行              | 夏目 勝弘 (44) |
| 甘酢ゆく                 | 堀川 勝子 (22)    | 「水魚」のことから(138)     | 岡本八千代 (45) |
| 母はるぬ                 | 平松 裕子 (23)    | ことのはスケッチ(403)      | 今泉 由利 (46) |
| 路                    | 山口千恵子 (24)    | 和菓子街道(69)          | 平松 温子 (48) |
| 「たんぽぽ」               | 小野可南子 (25)    | お知らせ・編集後記・三河アララギ規定 |            |
| 鬼怒川紀行(1)             | 夏目 勝弘 (26)    |                    |            |

## 感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

手の上の虹いろの海老けふありや海すこし見ゆる駅の日ぐれに

P  
200

おのづから居つきし白き野良猫の甘ゆるこゑをわれもにくまず

P  
201

歌集 「一本の木」

杉 浦 弘

象の背に背筋正して帝釈の半眼の目に何を見つむる

うつせみの男をみなを踏まへ立つ降三世明王裾ひるがへす

講堂の中往き返りつくづくと仏揚げばかりだ冷えきぬ

## 宵待草

蒲郡 岡本八千代

今年咲く今年の花々宵待草いまここに佇つひとり心よ

夢二の花宵待草の淡き黄<sup>きい</sup>しほめば紅<sup>べに</sup>の色となるはや

宵々の宵待草の花あはれなどか人恋ふ心になりつつ

佇ずみて宵待草の花の中御津先生載る愛知県史届く

宵々の宵待草の花あはれ今日も暮れゆく私<sup>ひと</sup>の一日

トンビ幾つ愛<sup>いと</sup>しきまでに高く舞ふ見えつつ書屋のカーテン閉める

かにかくに今日の一日<sup>ひと</sup>も暮れゆくよ明日<sup>あした</sup>は明日の風の吹くらん

男らしくなりたる孫の二人来ぬたちまち華やぐわが家の夕餉

突然に来たりし孫の若者と今宵は啜るわれのとろろ汁

ただ生きてをりさへすればよきかとも彼らと交はす「カフカの人生」

## 奥多摩

東京 今泉 由利

見渡しの山また山の奥多摩の海沢といふところ訪ぬる

奥多摩の光あふるる窓に寄り共に見上ぐるひとつ頂<sup>いただき</sup>

月にもつ小さな土地も今日の日のスーパームーンに少し大きい

地球なるあのことこのこと真自然のそのままそのまま数の法則

木もれ日のひとつひとつの金環の太陽のありえごの木の下

自動車のヘッドライトの範囲のみモノトーンの富士山樹海

五合目のなだりに残る白雪のその上に降る富士の白雪

金環の輪っかはテレビの画面にて富士山五合目黒雲の中

月も星も人の明りも無き闇をひたすら登る富士山を登る

小布施なるここに居られしそのことを葛飾北斎眼裏に追ふ

## 日食メガネ

豊川 弓 谷 久 子

定まらぬ空を嘆きて一日過ぐ今日より臯月とも思へぬ空を

スーパームーンと子が呼びくるる跨線橋の彼方に今し赤き月

満月が地球に近しばっかりと夜空に大き赤い月浮く

又明日は雨かと赤き月仰ぐスーパームーンと呼ばれる月を

カーネーション三本びんに飾りたり母を憶ひぬ母の歳越えて

御津山に今年も来ぬ鶯の声透り来る今朝五月晴れ

暗雲に空覆はれぬ一瞬の冷たき風にとどろく雷鳴

埒も無き事書き散らすボールペン又一本を使ひきりたり

日食メガネの黒き世界に太陽は三日月型に光りてゐたり

黒き世界に暫し心を漂はすこれが太陽今が日食

## 山里

新城 青木玉枝

わが庭も緑が映えてひとところ忘れな草の花の連らなる

山里にAコープ一つあればよし生活たつきの品も野菜も新らし

手押車に買物籠を乗せて入る店内めぐりの楽しきひと日

田植ゑ終へし水田は青く続きいて緑の風がわが頬なを撫づ

なんとなく通りすぎゆき振りむけば枯れし葉ボタンに黄の花咲くを

姪の庭百坪続く花園は芝桜一面花のじゆうたん

花のひげ優しく撫でて姪に問ふ黄翁きいおきなと言ふ初めての花

都会では見られぬ朝霧庭に立ち流れる山の見えかくれして

紫木蓮花桃八重の椿散り春の逝く里朝夕は炬燵の温もり

路ふきの臺とうたちの芽天ぷら頂きて夕食の卓は山里の味

## 水芭蕉

豊川 内藤 志げ

本宮の山頂かすめる黒き雲明日は里宮砥鹿の大祭

中腹に白雲浮ぶ本宮山晴れとなるらし砥鹿の祭り日

裏の窓玉蜀黍の長畝のリズムあるごと西風に揺るる

待ち待ちし水芭蕉を信州に友の車が今朝はお迎へ

飯田街道を上へ<sup>かみ</sup>上へ<sup>かみ</sup>とひるがみの花桃祭りの始まるところ

水芭蕉尋ねたづねて治部坂を山へ山へと細くなる道

池よりの細き流れに水芭蕉隠れ咲くごと<sup>と</sup>十株余りが

再びの逢ことなきや水芭蕉心うたるる刻忘れをり

また一つ次々出づる赤蛙上の池まで真つ直ぐに歩む

水芭蕉眺むる土よりするり出づ艶つや赤き大蛙が

## 梨の花

豊川 安藤 和代

梨の花遠くに見ゆるキッチンに水なみなみと食器を洗ふ

今しばし待てばよきもの蟠螂よ早緑深き野に返したり

信号待つ通園バスの窓からは三色帽子の顔がいつぱい

下校する児等の笑ひ声高らかにつられて吾も笑えてきたり

丁寧に蒔きたるオクラは生えずして零れし種が早ばやと出る

工廠の跡地に芽吹く草木々は散りたる御人の命と思ふ

お隣りの屋根の濡れいて雨と知る五月の雨よその静けさよ

母のなき孫に母の日近づけばそれにはふれぬ話題をさがす

教師たりし嫁の写真は三年二組囲まれ居間にはほ笑みてあり

母の日に吾にと孫はカーネーションその紅を胸深く抱く

## 「名古屋城」

東京 佐藤喜仙

冬の間の篠懸の枝百骸のさまなれ今は若葉萌え出づる

紫陽花のからびたる木と思ひしに葉の青々と花芽もありぬ

草叢に散り落ちいたる八重桜その草に咲く花のごと見ゆ

春の野を歩めば楽し仏の座野ゲシはこべら春紫苑見ゆ

東海の地に輝やける名古屋城その天守より御岳望む

名古屋城見上ぐれば鴟尾金色に初夏の日差しに輝きませる

薫風に青葉若葉のさやぐ音我は茶室で一服喫す

名古屋城の天守より見る濃尾平野豊穰の地は水匂ふなり

ひさかたの雨の新宿御苑の庭百種の薔薇に百種の香り

東京を高速道で横切れば東京タワースカイツリー聳ゆ

## いの里よき里

岡崎 林 伊 佐 子

櫨の芽も独活の芽も摘むわが山の自然の賜ものこの里よき里

独活の芽を胡麻和えにして夕餉する匂ひも苦味もわが好む味

山道に拾ひし棒切れ杖につき山菜とりに山を歩きぬ

一握のやぶれがさの芽つみながら胸一杯に深呼吸する

杉の木にからみし藤の花房がかそかに揺るる深山の道に

菜の花は穂先まで咲き咲き終へぬ捨てて根付き畑の隅に

蝶々に似たる花の豌豆も空豆も咲く五月の畑に

あさあさに吾が与へるパン屑を口にくわへて巢に運びゆく

朴の葉を取り来て作るかしわ餅かほれる味をうから喜ぶ

仏の座たまねぎ畑に咲き群れて草取る手を止め見れば清しき

## 蝸牛

豊橋 胃 甲 節 子

雨の日の庭に飛び散る木々の葉や花と一緒に這ふ蝸牛

傘さして庭掃く今朝の蝸牛二匹三匹残して置きたり

やや眩暈弱まりしと思ひ横たへど蛍光灯ぐるぐる廻り続けぬ

雨未だ降らぬに激しき雷鳴の轟きわたる真昼の暗さ

休刊日の朝の寂しさ如何ばかり新聞を待める吾かと思ふ

お土産の山葵の花の柔らかさみどり優しく初めて味はふ

若緑それぞれ違ふ輝やきに生き生き初夏めく吾の裏庭

桐の花見度きと思ふ幾度も天の橋立への山に咲きをり

吹く風に若葉のみどり陽に映へてキラキラ輝やく輝やき止まず

一声を吾が為に啼きすぐ去りて鶯は今日も忙しいらしい

## わがまま

大阪 伊藤 忠男

また雨か滅入る気持ちの消えたるはテレビにうつる田植えのシーン  
夜明け前眠りを覚ます騒がしき鶯の声わが庭の木に  
つい前の寒さに震え暑き日を求めしあの日今は懐かし  
わがままも時には嬉し笑顔にて孫の手を取り店訪れる  
コマーシャル始まりチャンネル変える度こちらも見たし前に戻れず  
癖なのか目の前にある新聞を取ってくれよとつい声かける  
生きること我儘なのか長寿国福祉年金かさむ世になり  
この世にて望みと欲が違ふなら得ると奪うに違いあるなり  
横車押して無理強いするがあり尖閣竹島わが領土なり  
政治家が目先に眩み我儘を通すこの国われの国なり

## 十 薬

新城 半田 うめ子

万両の赤き実の多く川辺にて鳥もねらはず楽しみ眺むる  
万病に効くと言ひし十薬を今日も煎じて飲みてゐるなり  
朝寝して昼寝して一人の生活孫のもち来る食品のあり  
風の吹き数多の落ちて前畑の紅梅の実の十つぶ成り居り  
松原の安藤様より紫の実のブルーベリーを頂き食みぬ  
杉山にて百六歳老女居りやさしき人と言ひし人あり  
菊芋を掘りてゐるなり金沢の西野さんより頂きて植へし  
紫の実の成りて居り畑中のひいらぎ南天鳥もねらはぬ  
楽しみて眺めゐるなり歩道にて咲きてゐるなり昼顔の花

## 花回廊

島根 金津 文枝

大山の一の沢二の沢道沿ひに残雪は多く高く続く

花回廊観覧車はゆつくりと我は板張りの廊より見下す

福祉専門学校卒業式校長先生の目出度く終了の礼状来る

外人はローマ字のハッピー着用し男性女性子供も揃え

献燈の提灯三千個夕暮のお務めの素晴らしさ友皆感動

江島大橋の上より見ゆる大型貨物船浪立て走る

八幡様の春祭に赤白のお餅籤引があたる

飯梨川に投網で鮎を取る人の鳶はねらう速し素早し

我が乗る車の右にモノレール三両大阪駅に着くまで

天理への銀杏並木は新芽して美し美し長く続くよ

## 指揮

豊橋 伊与田 広子

テレビにて音楽大学指揮科見る一番難かし科目と思ふ

指揮をする石上教授はN響など指揮せし主任教授と云ふ

指揮するに恰好ばかり気にかけて心の入らずと教授の叱責

成り振りをかまわず音楽に入り込みて指揮をすべきと教授は云ふなり

成り振りをかまはず動き指揮をしぬバーンスタインの映像を映す

指揮するに飛び上がりたりて靴音の入りと聞きしバーンスタイン

卒業の試験は個々に指揮をするそれを教授ら評価するなり

晴れし空ファイトファイトと言ひながら通り過ぎ行く中学生ら

竜巻は雨戸締むれば被害など少くなりしとわれは思ひぬ

雷や突風や竜巻起らむとわれは家に閉じ籠りをりぬ  
かみなり

## 新芽

春日井 清澤 範子

カーテンを開けて庭木を見上げたり椿の新芽伸びてつやつや  
気持重く八王子神社に願ふこと吾の心の強くなれること

深しんと空気張りつめ賽銭の音は響きぬ打つ柏手と

心弱き吾を励まし杖つきて願ひ多く祈りささぐる夫

境内にあべまきの梢高くして今日深しんとして風の吹くなり

安定剤切らさず喰みて家事をする小鳥の声をしばらく聞きて

吾が庭の椿の若葉は陽に映ゑて緑に光るをレース越しに見る

婿もなく孫もなくして吾が家の三人家族の暮し淋しも

世の中は仕方の無きことばかりなり苦笑でも良し笑ひ暮さむ

## 五月の雨

名古屋 近藤映子

雨もよい傘持ち行こうか迷いつつ夫の顔思いてバスに乗る

世の中の人々移動のニュース有りゴールデンウィークの淋し

息子等も嫁の実家に行ったきり夫と私の五月の休日

五月三日の夜娘と共に一時間半のピアノコンサートを

我歌は手書原稿郵送護りをるに友はインターネットにて見ると言う

我一人テレビニュースを見ても夫の様子の気に成りぬ

我夫の生まれし五月十日は近し変り無きを祈る夜半は

久しぶり息子夫婦を訪ぬれば「母の日」と言ひて丸きケーキを

又吾は咽喉痛む風邪引きて夫の見舞いを取り止めぬ

我夫の見舞も行けず担当の看護師長さんに電話にて頼みぬ

## この光

蒲郡 杉浦恵美子

何となく甘へてみたき心地する甘へらるるは夫しか居ぬが

果てしなく自問自答の繰り返しこんな暮しの未来茫々

八ヶ月忘れじと思ふ我が心今更いとほし未だ癒えてない

天麩羅鍋わが台所には用も無く棚に仕舞ひて一年以上

一年を共にこの家に暮したる小さけれどもひとつのいのち

この光この風が吹く五月空一年巡れり夫逝きし月

暮れなずむ家路に向かふ国道の行く手に聳ゆる五井山の影

夫と我とふたり暮しの我がわれが施主読経の間も段取り思へり

ああやれやれ法事終りて座蒲団の山に漸く気持解ほどけぬ

客去りし仏間にぼっねん改めて夫の居ぬのを思ひ知らざる

## 甘酢ゆく

豊川 堀川 勝子

我が膝にからだ預けてひたすらに寝息を立てる老犬「さくら」

我が膝に「さくら」の放つ「さくら」の匂ひ温き重さが私の膝に

十年を「さくら」と共に暮らし来ぬ我より先に逝くは定めか

甘夏の出荷終ゑたるコンテナにさやさやトマトのさ緑の苗

さし木して根付きし菊苗植ゑ付けむ雨降る予報を背中に聞きつ

雨の降る前に植ゑむと気はあせる植ゑ込む菊苗ケースに一杯

五株より始めし苺の露地栽培今年のご苗は二百株を越ゆ

五年過ぎ二百株越ゆ露地植ゑの苺栽培に慣れ来し我か

甘酢ゆくジャムの煮詰まる香の満ちて真赤なジャムの仕上がり近し

高く低くもつれ合ひつつ儚げにキャベツの茂みに見ゑざる蝶蝶

## 母はるぬ

豊川 平松 裕子

ひと草ごと思ひはありぬ水引も稚児百合もまた吾が植ゑしもの  
エプロンの紐一本も皺を伸ばし干せと言ひゐし母は逝きたり  
人を思はす姿もあらぬ母の遺骨一片もらひて紙に包み来し

父の遺骨納まる壺に母の遺骨入れてタンスの上に戻しぬ

今日の供華はキンケイ菊とデイジーなり我が庭に秩序なく咲きゐる花々  
母はるぬと思ひ出したるたまゆらに眼濡れ来ぬひとり走りゐて

狭き狭き国府の町中を走り抜けスリルがあると母は言ひゐき

対向車を待ちて路肩に車寄す母はこの町を好みて通りぬ

ポッコ屋の娘が老ひてポッコ屋をしてゐるだけよと心に言ひぬ  
本物と紛ひて触るる客のありソーラ電氣に舞ひ舞ふ蝶を

## 落

豊川 山口千恵子

出揃ひて田の面に青き小麦の穂雨混じる風に大きく靡く

忽ちに色褪せ萎えし藤の花朝より夫の房切り落とす

青々の落の茂みを掻き分けて太きを選び鎌にて切りとる

瑞々の落幾本を湯に放つみどりの色のすきとほりゆく

音羽川浅瀬に集まるアヒル五羽こもごも首のべ川底あさる

さらさらと流るる水の音羽川じつとたたずむ青サギ一羽

並べたる育苗箱を被ひゆく保温シートの風にはためく

尖りたる先に露もち青あをとシートの下に籽は芽生えぬ

金環日食始まりゐるらし暗くなるわが立つ地面もくもれる空も

雲切れし東の空に現はるる三日月形の部分日食

## 「たんぽぽ」

豊川 小野可南子

たぎつ瀬を小さき鳥影移りゐつ音羽の川の夕さにけり

野畑なるジャガ薯の花摘みゐつつ雉子鳴く声を近く聞きたり

寿恵先生の御骨納めみこつの今日の日を京の御廟にお供してきぬ

スモン病みて旅適はざりし寿恵先生尊とく守られ今日こその旅

御家族の胸に抱かれゆきませる御廟の杜の緑さなかに

「小母さんだー」児等の小さき両の手に迎へられたり半年ぶりに

朝顔は八十八夜に蒔くがよろし道行く人の教へくださる

盛り上る楠若葉のその緑朝のひかりを撥ねかへすほど

宿題は「たんぽぽ」一ページの音読を声張り上げて我に聞かしむ

藍ふかき切り子のグラスを拭き上げて今日の一日を終りとしたり

## 鬼怒川紀行(1)

豊川 夏目勝弘

バス並の運賃ならむ常総線車内をまへる冠毛目に追ふ

乗り継ぎて乗り換へきたり石下駅節はひたすら子規への許へ

百坪の母屋と書院は草葺き屋根白朽葉色にめぐらす多し

繁り立つ樹木に暗む広き庭書院の障子灰白明し

深ぶかと朽葉に埋るる枯山水小さき石橋わたりてみたり

春日さす書院の前のひと所一重の山吹静かに咲けり

病院にて思ふは目悪しき母のこと張り換へできざりし障子戸のこと

庭道の足下灯しし燈籠ぞ三つに崩れて落葉のなかに

厚らなる落葉ふみゆく踏み締むる音のたつなし一人の世界

出口なき深き森へと入りしごと音なき世界に息吹を感じづ

## ガレキ

横浜 阿部 淑子

福島津波のガレキの真中にて桜満開人々に咲く

福島津波にあい茨城の竜巻にもあいなお立つ女の子

エーゼットの室を満して花々は皆それぞれに持ちよりのもの  
エーゼットの教えに添いて詠む短歌短冊に書き飾られてあり  
冷房の電車の窓は開かぬまま鳶からみいる黒松林を

## 金環日食

東京 富岡 和子

花見つつ昔話はずきなくて抹茶は多目今日昼さがり

喜寿祝うありし日の母にこやかに孫も一緒のレマン湖ほとり

寒さ越し芽ぶきぬダリヤたくましい母の育てしあの色願う

小庭辺の茂みの中に見つけたよあのからすうり自生しており

アイリスの見頃の花にうす暗い金環日食はじまりしらし

## 川 面

豊川 白井 信昭

堤防を歩む歩む付きてくる十五夜の月川面に映えて

宮浦の行在所跡の川面まで降りくる桜の花びらいくつ

## 現代学生百人一首 東洋大学

新品の青い作業着に身を包み緊張しながら旋盤に触れる

山形県立酒田工業高等学校二年 佐藤 大河

顔知らぬ名前も知らぬ人達に生きてほしいと願った三月

山形県立真室川高等学校二年 門脇 優衣

七月はからっぽだったポケットを単語カードが独占してる

東洋大学附属牛久高等学校三年 高塚 信治

秋の空見上げながらの帰り道たまに一人もいいなと思う

埼玉県行田市立西中学校二年 田島 ななみ

# 『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

夫と来て「伊豆の踊子」の宿に泊る今宵河津川のせせらぎの音

岩瀬 信子

物干しに夜来の雨のしづく落つ朝日の中に光るきらきら

石田 文子

去年の秋友がくれたる大根の花白々しわが庭の隅

山崎 俊子

けふも干す二人暮しの白きもの初夏の風吹きくる中に

三田 美奈子

自販機の明るき光三所<sup>とこ</sup>あり西浦駅からわが家までの路

稲吉 友江

誕生日の金沢の友に電話する懐しき声聞くこの春宵

鈴木 美耶子

雪かむる大山見えつつ車中には松江に向かふひとりの我が

吉見 幸子

幾たびも君と向かひて話しをりただ「知らない」を返さるる言葉

牧原 正枝

## 私の一首

我の手をきつく払ひて金槌を握る拓真に少年を見る

堀川 勝子

小学二年生になった孫と、庭で「工作遊び」をしている時に出来た一首です。常には、遠く離れて暮らしている孫ですので、久し振りに会えた時のうれしさは格別です。歌としては、下の句を少し直して「握る拓真は少年の顔」とすれば良かったかと思っています。

長く見ぬ神田川堤は今頃は銀色に艶めく猫柳を見るべし

胃 甲 節 子

此の辺りは北風が強く吹き荒れて、天気予報も毎日強風波浪と出ています。強風の為、寒さ暑さの厳しい時は、仲々外に出る事が出来ません。神田川堤は、健康な時には、好きな散歩コースで、よく歩きました。特に柳は、若芽が、風にそよぐ春の風情が好きです。

猫柳が帽子を脱いで、膨んで来るのは艶々として、とてもきれいです。早く歩きに出て中州の、ふつくらと艶めく猫柳を眺めたくて、つたない私の一首となりました。

ぼた餅とお稲荷さんとぶら提げて朗らかに夫帰り来たれり

伊藤八重子

むかしは気安く助けてくれるような事もなかった夫が、今日は「一緒に食べよう」とぼた餅とお稲荷さんをぶら提げて帰って来ました。「長生きしてよかったな」と思う今日この頃です。

鮭イクラ買ったしと思ひつつ帰るなり歌会の帰り重き手荷物

伊与田広子

今は丸栄を離れほの国百貨店となりました。何時も散歩ながら歩いて、帰りはバスで帰ります。丁度北海道展をやり始めて間もない頃、鮭やイクラを買えば鮭は一切づつラップに包み、イクラは五百グラム程度あるので小瓶に分けて入れ、共に冷凍庫に入れ保存しなければならず、歌会の帰り疲れているのでその手間が煩わしく、私の目的物でもあるので後日買いに来ようと思い（当面）食べられる物を買って帰宅したことを歌ったものです。

「俳句」

北斎のグラデーションや濃紫陽花

植村公女

しづかなる蛇笏の旧居緋のつつじ

路線図の堂々めぐり蜘蛛の糸

太陽と月と地球の初夏の宴

一石

悔しさや金星探す梅雨の入り

万緑の生命力に抱かれる

みちのくの城に石割る遅桜

喜仙

高々と辛夷の空の晴れ渡る

薬飲む水道の水温みけり

どくだみの白き白花ここかしこ

皓一

松蟬の突然に鳴く暑さかな

夏未明花の白きに立ち止まる

## 贈呈誌 五月号

「青森アララギ」

阿部 勝美

丘畑の乾きはげしき麦の根に埃<sup>ほこり</sup>立てつつ土寄せる妻

「愛媛アララギ」

大津 邦子

青海苔の解禁は間近その前に馬鈴薯を伏せ麦畑を打つ

「鹿児島アララギ」

千葉 源治

春風に白く乾ける畑に鋤く鋤の刃先のかるやかな音

「高知アララギ」

小松 敏子

もう無理とやめしハウスの古株に苺は赤く熟れていにけり

「滋賀アララギ」

桐畑 か寿恵

年明けて初めて畑を見に行けば縦横無尽に鹿の足跡

「冬雷」

高橋 耀子

蒔く種を並べて作業の計画す稔りのさまを思い浮かべて

「柊」

阪井 奈里子

ノズルレバー引けばどくどくと掌に響き車に油のいきおいて入る

「群山」

寒河江 巖

葱畑の地面まで掘る雪嵩よ啓蟄の日にスコップ立てて

「檜の木」

竹下 祐子

仕上り日メモせし紙切れ張りつけて大根切干袋につめる

「穂の原」

中井 恵美子

蹲踞の朽ちし竹を取り替へり今は小さく小さき水音

「かさね」

菅原 孟

あめんぼの大きな影や水の底

「明治記念総合短歌大会」

特選歌

加津 牟根夫

草を刈る音それぞれに癖ありて妻はときをり土を切る音

小二

内田 くるみ

何が好きって聞かれたよお母さんが洗ったトマトおいしいなあ

小三

佐野 峻祐

おぼうさんどうしてあれほど読めるのかほくはたいくつ足がしびれた

小五

小島 遥

お正月親せきみんなでかるたとりとれた数だけうれしさが増す

中一

轟 英美里

ペン立てに昔使った鉛筆あり毎日削って書いてたっけ

中二

星野 遼太

コーラスの指揮台に立って顔上げる今日は皆のワイシャツ白い

## 和歌から派生した季語の本意（最終回）

「かさね」「笹」 佐藤 喜仙

67 夏野（卯月野・五月野・青野）

「夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らぬ恋は苦しきものを」

大伴坂上郎女（万葉集）

「男鹿ふす夏野の草の道をなみしげき恋路にまどふころかな」

坂上是則（新古今集）

夏の野には葎・蓬を初め百草が丈高く生い茂り、直射日光

も厳しく、むせるような草いきれのたつのが夏野である。簡

単には踏み込めない拒絶感がある。

例句

うつくしく牛の瘦せたる夏野かな

凡兆

飛ぶ雲の皆向ひ来る夏野かな

余子

汝ひとり花摘む遠き夏野かな

梅の門

68 夏越（夏越の祓・茅の輪・形代流す）

「みなつきのなごしのはらへする人は千年の命のぶといふなり」

詠み人知らず（拾遺集）

「大幣の川の瀬ごと流れても千年の夏は夏祓へせむ」

紀貫之（貫之集）

陰暦六月、十二月の晦日は、一年を二期に分って、来るべ

き新たな時節にはいる祭の忌の日であった。祓といつても内  
容は穢れを落す禊であつた。それがだんだん形骸化して人形  
の形代で体に触れ、それを川に流し禊とするようになった。

例句

蓮田風あほつ形代流しかな

波郷

淡々と生きて過ぎて茅の輪かな

登四郎

形代の夫の名わが名水に消ゆ

春子

69 羅（<sup>うすも</sup>絹・紗・上布・薄衣・薄ごろも）

「ひとへなる蟬の羽衣夏はなほうすしといへどあつくぞありける」

能因法師（後拾遺集）

「しのめのゆふつげ鳥の鳴くこゑにはじめてうすき蟬の羽衣」

藤原定家（建久七年百二十八首）

盛夏のころ用いる絹、紗、などの薄絹で作った単衣を言う。

古くは「蟬の羽衣」と言つて、蟬の羽のように薄くて軽い着  
物に言つた。

例句

羅の乙女は笑まし腋を刺る

久女

羅をゆるやかに着て崩れざる

たかし

羅や人悲します恋をして

真砂女

## ある自然科学者の手記(2) 大橋望彦

### 「DNA鑑定雑感」②

個人識別に用いられているDNA鑑定に話を戻すと、この鑑定の基本には個人と個人の間でDNAを比較するとき、どれ一つとして同一の塩基配列順序を持ったものは無い事を前提にしている。そしてまた、個人の何処の体細胞を調べても全て同一のDNA塩基配列順序を持っているのである。だからほんの少しの血液でもそこに含まれる結球中のDNAから個人識別が可能となっているのである。

このことは、先に述べたDNAポリメラーゼがいかに忠実に複製を行なっているか、即ち、精子と卵子が結合して、受精卵となって最初の細胞分裂を起こして以来個体が形成されるまで、通常成人の細胞数は約60兆個あり、それまでの分裂回数は天文学的数字に値する程であるが、それは実に正確に忠実性が保たれていることを示しているのである。

そこで疑問がどうしても生じてくる。では、なぜ個々の個人を対象に考えると、誰一人として同じDNAを有していないのは何故なのか？ 兄弟、姉妹、まして親子の間でも、確かに類似はしているものの、同一のDNAの塩基配列順序は無いのである。

ただ、一卵性の双生児だけは例外的に極めて類似したDN

A塩基配列が認められているが、それとても、詳細に調べれば完全に同一であるとは言えない。只、人工的に作成した(所謂バイオテクノロジーで)ネズミ、ヒツジ、ウシその他植物等クローン生物という実験生物がいるが、これらは例外的に同一のDNA塩基配列順序を有する生物である。

これら実験生物(クローン生物)では最初の段階で無核細胞に核を注入移植して、卵割させることから始めるので同一のDNA塩基配列をもつ細胞からなる生物が兄弟として製作できるのである。

そもそもDNA塩基配列順序の異なる個体が生ずることは不思議なことでは無いとも言える。受精卵が個体の最初に出来る細胞であるが、男親由来の精子と、女親由来の卵子はそれぞれ有しているDNA塩基配列が異なっている。普通、個体中の細胞では、常染色体(性染色体X、Yを除いた他の染色体のこと)は、ヒトの場合は、精子から22体と卵子から22本が受精卵中で混在して計44本存在している。それに両親由来の性染色体から構成されるXX(♀)、XY(♂)のどちらか2本が加わって、計46本の染色体で成り立っている。この46本の染色体に含まれるDNAは、当然、父方と母方から由来したDNAの混合体となる。この組み合わせは父か母が異なれば違った組み合わせとなるわけである。しかし、それでは、兄弟、姉妹は両親が同じであるのが普通なので、全く異なるDNA塩基配列順序の存在することの説明は簡単ではない。その説明には多少ややこしい説明をする必要

がある。

まず、ヒトの細胞中にあるDNAを構成している塩基はどの位の数かというところ、 $2 \times 10^{10}$ 個程度存在してゐる。しかし、現在知られている遺伝子の数は $3 \sim 4 \times 10^{10}$ 個程度に過ぎない。そして、実際に蛋白質を作るための塩基数は全体のDNAの塩基数から見ると僅か1%に満たないのである。しかも、それら遺伝子には実際にアミノ酸に対応する(3個の連続した塩基配列順序で1個のアミノ酸をコードしている)部分、即ち蛋白質の構造を決定している部分はエクソンといわれる部分で、その他に、そのような情報を持たない遺伝子のイントロンという部分が存在する。

実際に遺伝子が特定の蛋白質を作るときの情報発現は、このエクソンとイントロンの部分が繋がったまま読み取られてRNAという核酸に写し取られる(DNAの塩基配列順序を読み取り、そのままの塩基配列順序を持つ別の核酸RNAを合成する過程を転写、トランスクリプション、という)。その後イントロンの部分に相当する所が切り取られ残ったエクソンの部分が繋がって初めて遺伝子情報が伝達できる形のmRNA(メッセンジャーRNA)核酸となる(この過程をスプライシングという)。このmRNA上で順番に塩基配列順序に従って各種アミノ酸(20種類ある)が読み取られながら繋がって蛋白質が合成されていく(この過程を翻訳過程、トランスレーション、という)しかも、ヒトの遺伝子の中にあるDNAの構造は更に複雑で、短い塩基配列順序が

繰り返し繋がっている構造(反復配列)が沢山存在していることが知られ、特別なDNAの構造を呈している。例えば、AT(アデノシン塩基とチミン塩基の繋がったもの)配列が沢山含まれる構造が数千も繰り返し返されている部分があり、これをサテライトDNAと称して特別な構造と見ている。この構造は全ての染色体の中心部分(セントロメア付近)に存在し、細胞分裂のときに、索引糸がこの辺りに結合して、染色体は、二つの細胞にそれぞれに存在する中心体の方向に引く張られることが知られている。また、染色体の末端部分に位置する所にも別の反復配列が沢山あり、それは6個の塩基配列が数千も反復しているテロメアDNA(端末DNA)という特殊なDNAが存在していることも知られている。

この構造は何の役割をしているのか完全には知られていない。只、外部環境により何らかの侵襲を受けた時、トカゲの尻尾切りのように、ある程度この塩基を切り落として細胞の生存に役立っているという説があり、細胞の老化と関係すると考えられている(老化した細胞の末端DNAが短くなっていることが知られている)また、DNA構造は二重の螺旋構造を持つことはよく知られているが、それが、そのままではもつれたり、切断されたりしてしまい、極めて不安定な状態であるが、その保護的役割としても特別なアルカリ性蛋白質(ヒストンという小型の蛋白質)が周囲に存在し、核酸が酸性であるので、イオンの結合し易く、互いに結合して安定化している。(つづく)

## 絹の話 (20)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

### 絹と輪廻

人は誰でも永遠に若く輝いていたいと思うのは古今東西の常でしょう。神様が色々な動物を創造された時、人間だけが「そんなに長生きしなくても良い」と言う他の動物の年をもらいました。神様は20歳もすぎると、面白おかしい事が減って、苦勞が増えるが、それでも良いか念を押したそうです。人はその時から不老長寿願望に取り憑かれました。昨今は更に神様が下さった年の倍も生きる様になり、年を盗られた動物の絶滅が絶えません。その昔、釈迦は「森羅万生々流転するものが浄であり、必ずや生あるものに生まれかわる。滅する事を恐れる事は無い、無になる事が最も崇高な事」だと説いています。

翻って絹を見てみよう！絹は今日でも繊維の頂点にあります。絹はそれ自体軽くて艶があり、しなやかで、防紫外線、抗菌性、保温、保湿性、防臭性―など機能性に満ちています。

所が摩擦に弱く、化学繊維にはかなわなくなりました。さらに化学繊維は記憶形状、UVカット、抗菌等の化学処理に成功し幅広く利用されていますが、健康障害を起こしたり、環境汚染の一因を作ったりして、不浄布といわざるを得ない面もあります。

天然繊維は動物の命と同じく耐久性に限りがあります。それを慈しみ使い込み、風合いも、染色も留まる事無く流転していく事が、釈迦の云う「浄」ではないかと思うのです。

ある時、私共で数年前に作った色違いの洋服を着た二人のお客様がいらっしゃいました。一方は何回も洗ってお召しになつている様で、風合いも色もその方にじっくり馴染んで実に清楚で品よく、新しい時とは違ったその人の服になっており、感銘する事しばしばでした。やや若いもう一方は洗濯機で洗えばなしでしょうか、しわしわで、ややみすばらしく、両者の生き様が見事に服に現れているのを目の当たりにしました。洋服にも色々な流転が有るようです。

もう20年も前インドを旅していて、寺院の門前を通りかけた時、パートナーのインドの女性が「ちよっと待って

て！」と言って、寺院の中に急ぎ足で入って行き、戻って来て尋ねると、屑糸を喜捨して来たと言うのです。

着ているサリーの裾がほつれて屑糸が出たから、それを喜捨したのだそうです。その時ハタと思い出しました!! 正倉院御物の中に糞掃衣と云う天竺渡りの僧衣があることを!!

インドの寺院は今日でも喜捨された屑糸を僧衣として使うのだ!!と、それが使命を終えると、紙に漉かれたり、蚊遣りになって大地に帰る迄使い、草木の肥やしになり、それを人や虫が食べ、糸になる物も有り、生成流転輪廻の世界にある布を「浄布」と云う、と聞いた事があります。そのようなインドの日常に触れ、天平の時空に引き込まれたようで、感無量でした。従ってインドでは然るべきサリーやストール、シヨールは今日でも両端をまつたり、縫つたりせず、糸がほつれるままに使う事が浄であり、まつたりする事を不浄と考えているようです。

10年近く前迄日本は絹の原料の輸入を制限していました。インドからシルクのサリーを輸入するのに、両端が縫われていないので原材料と見なされ簡単に輸入出来ないで、出荷

前にサリーの両端を縫う様に依頼すると、インド側からそんな不遜な事は出来ないと言文化摩擦が有りました。

今でもインドの染め物は色が落ちるから「嫌だ」という人が多いのですが（粗悪品は別）、色が次第に移ろって行くように染めるのも浄、不浄の考え方に由来するのだと思います。そうはいっても手間のかかる自然染料染めは少数派になりつつあり、堅牢な化学染料が主流になっています。やはり末法の世に入ったとおもわれます。

絹は使い古したら、布団や枕カバーにしたり、厚く重ね就寝時の腰当てや、小さい物なら傷口のガーゼ代わりにして、最後には切り刻んで鉢植えに敷いて、土に帰して下さい。血行促進、防臭、化膿止めになり、鉢枯れを防ぎます。

僅かなマイナスイオンの発生が森林浴の様な気持ちの安らぎをもたらします。絹はどんなに古くなくても機能性は衰えません。絹を筆筒の肥やしにせず、最後の最後まで使ってください。一世代前の人達は生活の知恵として当たり前にしていたことです。絹はどんな繊維より安らぎ、健康、環境に寄与する、輪廻に叶った繊維です。

## 物理学者と詩歌の世界 (30)

一石

### 楊振寧 (Chen-Ning Yang)

楊振寧 (Chen-Ning Yang 1922-) は中国系アメリカ人の物理学者。1922年清華大学の数学の教授の長男として、中国安徽省に生まれた。西南連合大学を卒業して (1942)、シカゴ大学に留学し (1945) エドワード・テラーの指導下、博士号を得、エンリコ・フェルミ (参考文献1) 助手となる。その後プリンストン高等研究所の所員・教授を務めた (1949-1965)。1964年、米国籍を取得。1966-1999年、ニューヨーク州立大学の教授となる。専門は理論物理学 (統計物理学と素粒子論)。(参考文献2)

プリンストン時代、コロンビア大学の李政道 (T.D.Lee) と「素粒子間の弱い相互作用におけるパリティ非保存」に関する共同研究を行い、パリティ対称性の破れ (注1) が存在することを示唆した。このことはただちに同じ中国出身のコロンビア大学の女性物理学者、呉健雄 (C.S.Wu、注2) らのチームによって実証される。この業績により、楊振寧 (34歳) と李政道 (30歳) の2人は1957年度のノーベル物理学賞を受賞。中国系のノーベル賞受賞としては、初のケースになる (注3)。他にゲージ理論におけるヤン・ミルズ理論 (注4)、ヤン・バクスター方程式 (注5) など、多くの業績

がある。アルベルト・アインシュタイン・メダル (1995) など多数の物理学賞を受賞。

楊振寧は1971年に、米国籍の中国人学者として中国を訪問し、中米文化の交流に積極的な役割を果たした。2004年には北京に居を定め、「文革」によって破壊された中国の高等教育と科学研究の再建、特に中国物理学会の「再興」に尽力している。アメリカ物理学会、中国科学院、中央研究院 (台湾)、ロシア科学アカデミーなどのアカデミー会員。最初の妻の死後、2004年には、54歳年下の大学院生と再婚したことも話題となった。

楊振寧によるいくつかの言葉を挙げる。

○「中国の教育制度は完全なものではなく、改革の必要がある。たとえば、才能ある学生に自由に活動する機会を与えるべきだ。そうすることで、さまざまな分野で優れた人材を育成することができるだろう。」

○「私は中国に生まれ、大学、修士までの教育を受けた。現在、中国に戻って定住した。両親は中国人であり、私の心は永遠に中国に属する。長い年月の中国の巨大な変化をこの目で見る事ができた。中国が達成した成果は歴史的にも見られないものである。」

○人間は幼い頃から「直感」を持っており、従って、書物による知識が直感と一致しない時こそ、研究力を高める絶好のチャンスである。

○中国の教育では「指導」が重視されるのに対し、米国では「啓発教育」が一層重視されている。

○若い学生への講演で、自らの研究者としての経験から何が重要かを以下のようにまとめている。

1、書物の知識より、新現象・新方法を一層重視する。

2、自ら研究テーマを見出す。

3、良いアイデアがあれば、簡単に諦めない。

4、基本となる問題は疎かにしない。

注1…鏡に映された世界は、通常の物理現象を見ているかぎり現実の世界との違いは判別できない。この様に空間反転した状態と元の状態では物理法則が変わらないことを「パリティが保存されている」、または、「パリティ対称性がある」という。物体に働く力は重力、電磁気力、強い力、弱い力の4つの力に分られる。これらの中で、パリティ対称性の破れがみられるのは、弱い力の関係する物理現象のみであり、他の3つの力ではパリティ対称性が保存されている。通常、弱い力では人間の目で直接観察できないため、長い間、すべての物理法則でパリティ対称性が保存されていると考えられていた。

注2（参考文献3）…中国系アメリカ人物理学者呉健雄は弱い相互作用におけるパリティの非保存を初めて実験的に確認した業績で知られる。プリンストン大学（1942-1944）、コロンビア大学（1944-1980）で教授を務めた。第二次世界大戦中はマンハッタン計画に参加してウラン燃料の濃縮手法の研究を行った。科学者からは「物理学界のファーストレディ」「中国のキュリー夫人」などのニックネームで呼ばれた。呉の研究によって李と楊

はノーベル物理学賞を受賞したがなぜか呉は受賞の対象とならなかった。この事実はノーベル賞選考委員会の性差別主義によるものとして広く非難された。彼女は後に、鎌状赤血球症の原因となるヘモグロビンの変形の際の分子変化の研究などと研究分野を広げていった。アメリカ物理学会最初の女性の会長（1975）。最初のウルフ賞物理学賞を受賞（1978）。

注3…中国人のノーベル賞受賞者には楊振寧、李政道、サミュエル・ティン（素粒子物理学）、李遠哲（化学賞）、劉曉波（平和賞）の5人がいる。

注4…ヤン・ミルズ理論は、1954年に楊振寧とR・ミルズによって提唱された非可換ゲージ場の理論のことである。元々は、数学者ヘルマン・ワイルらによって研究が進められていた（可換）ゲージ理論であった。このゲージ理論を物理学の世界に應用して生まれた、強い力や弱い力の場についての理論が、ヤン・ミルズ場と呼ばれるゲージ場の理論である。

注5…ヤン・バクスター方程式は統計力学における格子模型の解を保証するもの。

## 参考文献

- 1) 三河アララギ、エンリコ・フェルミ、p 36、第58巻、第5号（2011）
- 2) Wikipedia, the free encyclopedia, “Chen-Ning Yang”
- 3) フリー百科事典『ウィキペディア』呉健雄』

## 短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

### 二、中村憲吉 3

あつまよりはるか来給ひし君と居てこの三日間は実に  
みじかし 昭和八年『軽雷集以後』

言挙げぬ忝なさや君を見てわが病む心落著きにけり  
君を泊めむ飯家を狭み小夜更けて同じ浜への宿へ送り  
ぬ

昭和七年結核を病んで療養していた憲吉を広島に見舞った茂吉は三日間そばにいた。二、三首目には、「斎藤茂吉君に老兄遠路の御見舞は実に謝するに辞なく候。往年老兄長崎に病みし時故赤彦兄西下せし事など思出して感慨催し候」と詞書がある。二首目は礼を尽くした挨拶もろくに出来ず心苦しいが茂吉を見ると心が落ちつくというのである。三首目は、隔離された「仮家」には泊まつてもらうわけにゆかないので別の宿に送らせたというのである。見舞った茂吉は医者で眼で診た憲吉のことを日記に、「診察スルニ、両側スデニ犯サレ。ラツセル多クキコユ」「中村君ノコトガ心配ニテナカナカネットカレズ」と書いている。憲吉は翌年五月に永眠する。

以下は、「中村憲吉君を憶ふ」と題する茂吉の挽歌である。

うす寒きけふこのごろやひとり居るさびしき時に君を  
おもふも 『白桃』昭和九年

電報を受取りぬれば海中の浪なぎはてしことのしづま  
り わたなか

君と共に歎きしことのおもひでも戯れのごとく吾老いにけり

ほがらかに遊びし春秋をわれひとり偲びて居らむ四つ  
のみほとけ

ある宵は心みだれてありありと君がやまひを吾はおも  
ひき

### 三、岡 麓

岡麓はアララギにおける茂吉の歌友の一人であるが、長塚節や伊藤左千夫らと親交が深く、茂吉などは一目置いた先輩格であった。

麓は、大正六年、「斎藤茂吉氏送別歌会」と題して次のように詠んでいる。

君が行きわれものらむ大洋を遠く渡らす身をすこや  
かに

わがどちのあつまりよりていはへれば必君に事なかる  
かならず

べし

『庭苔』

これは巢鴨病院医員であった茂吉が長崎医学専門学校教授に任ぜられて赴任する際に開かれた送別歌会での作である。一首目は、長崎に向かうことを「大洋を遠く渡らす」と、まるで海外に行くかのような大げさな表現になっているが、それだけ別れを惜しむ気持ちが強いということであろう。「渡らす」という尊敬語の使用に茂吉に対する気持ちがあるこもっている。

麓は「茂吉兄帰朝」と題する歌をも詠んでいる。これは大正十四年一月に三年余の留学を終えてヨーロッパから帰国した茂吉を詠んだものである。

かへり来し君に逢ふこそうれしけれよろこび事はすく  
なきものを  
かへり来し君ふとれりとつつましく古実のいふをきく  
がうれしき

一首目の「よろこび事はすくなきものを」は、滞欧中に知った実父の死のこと、関東大震災で養父の紀一が経営する青山病院が大損害を被ったこと、大正十三年四月の「日光」創刊に古泉千樫、釈迦空、石原純がアララギを離反して参加したこと、加えて帰国の船中で青山脳病院全焼の知らせを受けた

ことなどを意味している。二首目の「古実」はアララギの歌友藤沢古実（赤彦門下）のことである。「日光」騒動に関しては、アララギを守っている赤彦に意見を述べた手紙は残っていない、アララギの先輩である平福百穂宛の手紙に、「日光」連の歌などは、いい加減にしておき下されたく候。真面目に批評すれば、教へてやるやうなものに御座候。石原、古泉、釈等、アララギで育つた人々が『日光』などに参じたのは『武士』の道には無之候べし。本人どもにとりてはいろいろの又理由も候べけれども。」（大正十三年四月二十七日付）とあるのが最も古い。茂吉がこのような怒りを持っていることはアララギ内部の人はよく知っていただろうから、麓の歌の「よろこび事はすくなきものを」には当然これが含まれるはずである。

四、伊藤左千夫 1

伊藤左千夫は茂吉の最初の短歌の指導者である。茂吉は明治三十七年秋に刊行されたばかりの正岡子規歌集『竹の里歌』を読んで作歌を志したと言っている。そして、明治三十九年に左千夫に送った短歌がはじめて「馬酔木」に掲載された。「馬酔木」は明治三十六年に左千夫が中心になって創刊した歌誌である。

## 鬼怒川紀行（1）

夏 目 勝 弘

今回も場所を探すことから始まる旅となった。的確に場所を教えることの難しさを痛感させられ、常総線取手駅に着いた。常総線の運賃はバス並であり、JRの倍以上だとプチ不満を抱きながら石下駅に到着。

帰りに歩くと決め、タクシーにて、長塚節の生家まで行く。案内所に二人のボランティアが居て、百坪の母屋とそれに続く書院（いづれも草葺き）を案内してくれると言う、無料だからと言うのを断る。

すべてを見聞きしてしまうのが、少し淋しく思え外から自分の目で見感じ、長塚節の世界に入ってみたかった。

ささぐべき栗のここでも掻きあつめ

吾はせしかど人ぞいままさず

広い広い屋敷内で採れる野の物を子規に贈ってきた。山椒、榎の木の芽、栗等々を前回栗を送った時、その保存方法を知らせてあり、今年もと拾ひ集めていたとき、子規の訃報が届いた。その時の挽歌四首のうちの一首。

春雨に梅が散りしく朝廷に別れむ

ものかこの夜過ぎなば

妹とし子あすは嫁かむの詞書あり、この庭の梅の木は今枯れ、ジンのみが太ぶとと苔むし書院の前に残っている。その枯木から往時の梅の木の姿が、庭の様子が浮んでくる。

さびしうに母と二人し見る庭の

雨に向伏す山吹の花

庭への門を入り右へ行くと目の前に丸く刈り込まれた軒

にとどくまでの山吹、一重の黄の花が、静かに咲いていた。喉頭結核となり

生き死にも天のまにまにと平らけく

思ひたりしは常の時なりき

そして妻となるべき女性との別

癒えぬべきたどきも知らず病みたれば

悲しと来しに我は逢はぬに

詞書に、既に五十日にも餘りぬれば我が病院生活も半を過ぎたらむと思ふに、待つ人の逐に来らねば徒らにおもひを焦すに過ぎず（以下略）

張り換へむ障子もはらず来にければ

くらくぞあらむ母は目よわきに

落葉に埋れた枯山水の流れの跡を辿り広い庭の奥へと進んで行き、振り返り書院の方を見る、仄ぐらい樹木を通し書院の障子の白さが浮きたち、その白さが何んとも言えず淋しく感じられた。

杉の葉の梅の木にして懸れるを

見つつ佇むそのさゆらぎに

また書院の前まで戻り、枯れ残る梅の木の横にしばらく立っていた。杉の葉の懸るような枝々などもうない、黒々とジンとなったその先が書院の方に向く、肩を落し項垂れた姿に見えてきた。

糠斗菜を母と二人が見てし日は

障子はいまだ白かりしかと

オダマキの花は見られなかった、ただ書院のあの障子の白さが、今も脳裏にある。

## 「氷魚」のことから (138) 岡本八千代

きのう（五月二十一日）は、九百三十二年ぶりの金環日食。その金のリングの輝きを見ようと日本中の人々が沸き上がっていた。今日（二十二日）はまた、東京スカイツリー（墨田区・634m）の開業で、老いも若きも子供たちも大騒ぎの様子である。

ひとり静かに思う。太陽の謎、空に向って建てられた人間の力の謎を。……割り切ることのできない不可思議――、そこに私は私なりのロマンを感じる。

「人間は生きている限り、子どもも大人も空想を編み続けている」とモリス・センダックは言っているではないか（5月19日の中日夕刊の『大波小波』より）かくして私、子規の小説に思いをつなぐ。

「当世媛鏡」の続き。

九ゝ十二。（同じ年の秋）九。

○あの川瀬山治郎なる男は、一つの話をもってきた。それは、大磯に新築した「諸越樓」という料理屋奉公の話をお清にもってきたのだった。

○清は「何事も才様のためならば」と叔母を口説いて、「諸越樓」へ働きにゆくことにした。

○その楼には、下女三四人、その中の下女大将お瀧は、お清に興味をもって、何かと世話をやいたり、相談にものつ

たりした。が、お清をからかったりもした。十。

○お清は、大磯へ来てからは失望することばかり。主の女房に叱られ、朋輩の誰彼に嘲られ身をむしられる程の苦を感じながらも忍びつつ働いた。お清は金のこと、金の大切さを知り、そのために働くという人生の秘密を知ったのであった。

○清は、「ここへ来るのではなかった」と思っているうちに、三番のお客さんへお茶を運べと命ざれ、茶を運んだ。見れば、年頃二十許りの美少年、色白で髪は黒く処々に小さな頬黒さえ美しく見えた人だった。

十一。

○その男の名は、中谷豁なかにあきらという人であった。二人が会話しているうちに、わかつてきたことは、浅草で雨にあったお清に、やさしく傘をさしのべてくれた人だった。

○会話の中には、大磯の回りの名、伊豆の犬島、火山の煙、鰯網、花水川、花水橋、化粧坂、化粧井戸、虎子石、虎の涙雨、の名が出てくる。

十二。

○お清が中谷を懐かしく思うよりも…中谷の方がいっそうお清を懐かしがった。

○中谷が東京へ帰る別れの時、後で見てくれと渡された一枚の手紙があった。

○「祐成が惜みし春の夜明かな」雪中庵蓼太の句が書かれて、豁と、あった。（つづく）

## ことのはスケッチ(403) 今泉 由利

### 『富士山』

大きな憧れ、私の頭を占めてしまっていることがある。

国立博物館で出会った。富士山の天辺、噴火口の凸凹ごつごつ巨石。太い墨の線で描かれている。

お手本どりに描かれることが多かったあの頃、本当に富士山頂まで登られたのだろうか。航空写真など無かっただろうに。想像を描くなどということが出来たのだろうか。自由奔放：富岡鉄斎七十歳、八十歳の頃『富士山頂の図』

その絵に出会って以来、富士山噴火口を描きたい、と思いつづけている：でも私には登れないと決めてもいて。

宝永の噴火口に入り込んで『不思議な写真』を撮っている友人がいる。今度彼が撮影に出掛ける時頼んで連れて行ってもらおうか…。

あれこれ模索しているとき、『富士山五合目から金環日食を見る、後、富士五湖を巡り、山梨のほうとうを食する』というツアーを見つけた。

富士山に異変がおきている…。噴火するかもしれない。富士山は活断層の上にある。いつ崩れるかもしれない…。このごろ恐ろしいことがよく聞えてくるけれど、富士山と一緒にならどうなってもかまわない。出掛ける。

私の家から十分ほどの上野駅よりバスで行き、上野駅に降り着く。こんなに楽。

次の日の朝七時の金環日食を見るため、夜の十時半、上野を発った。

途中、サービスイリアにバスは止まり、富士山のスバルラインの朝四時の開通まで、バス席のまま四時間の就寝タイムになったのには驚く。

どんなにしても体中が痛くなってしまう後、真っ暗のスバルラインを走るのはうれしかった。いくら見ようとしても何も見えない暗闇。

その昔、パナマ運河を大きな船で通った時も、船の最先端で、まわりはジャングルを見ようと頑張ったときも、墨の中にいるような暗さに、何も見えなかったことを思い出す。

朝まだ明けない五合目に着き、朝日から金環日食になってゆくはずなのに、厚い雲に覆われて、雨が降っていた。

せめて、五合目の山肌を！もむなく、念を入れ真黒い雲がおりてきて覆い被さり、さっきまでの雨は『横殴りの雪』に変わる。まさしく零度。

東京の友人から「曇りだけれど今、金環日食見えている」とメールが届く。

「頭を雲の上にだし…」って歌ったのを信じていて、甘かった。五合目は、完全に冬だったけれど、三合目あたりまでスバルラインを下りてくると、淡陽が当る新緑が美しかった。その中に、火山性の土壌にしか生えないといわれる富士桜が、小さな花。綺麗な花盛り。あそこに、ここに。でしゃばらなくて、可愛い。

二合目から下の方には富士桜はもうなくなつた。

五つの湖の一つ一つに、自の足で近づき、湖畔の草々、花々に会い。風に会い。喜びに会った。

ほんの短い時間のうちに、厳冬から早春、春酣まで：富士山を肌で感じた。

帰宅し、テレビ画面で金の環を見た。

## 和菓子街道 (69)

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

草津宿をあとにし、ところどころに松並木の残る住宅街を経て進む。大津市に入ってしばらくゆくと出会うのが、瀬田川に架かる「瀬田の唐橋」だ。室町時代の連歌師・宗長の歌「もののふの矢橋の船は速けれど急がば回れ瀬田の長橋」は、波風の強い琵琶湖を航路で渡るより、遠回りでも陸路で瀬田の橋を渡った方が早く京に馳せることができる、と詠ったものだ。

琵琶湖名物といえばシジミが知られている。古くから黄疸や肝臓病の特効薬として珍重され、江戸時代には京の町にも瀬田のシジミ売りの声が響いていたという。そんな瀬田のシジミを模った最中「瀬田しゝみ」を作っているのは、創業明治23年に瀬田の唐橋のすぐ近くで暖簾を上げた角安だ。シジミ最中とはいえ、シジミエキスは入っ



ていないので滋養豊富というわけではないけれど、中の求肥と餡が旅の疲れを癒してくれることは間違いなしだ。

シジミ型の最中皮の中に隠れているのは、小豆餡を包んだ求肥。

◆角安本舗

住所：滋賀県大津市瀬田2-3-11

電話：077-545-2394

## お知らせ

▽八月号原稿は、七月一日(日)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

▽三河地方も、まもなく田植えの時季です。黒々と耕やされた田面すれすれに、飛びかうツバメの姿が見られない。家々の軒先の巢に、孵った雛の鳴き立てる様子も見られません。私たちの、生活様式の変化にとともなうことかと、少し淋しい思いがします。

▽五月二十日、金環日食がありました。

広範囲に見られるのは、平安時代以来のこと。日食グラスを持つて外に出たが、三河地方は、東の空はあつい雲に被われていて、金環日食は見られなかったが、一瞬雲が切れ金環日食の終った後の部分日食は見られました。残念でしたが、雲がわき、雨が降るのも人間の営みにはなくてはならない自然の一つなのだと、思いあきらめました。(山口)

## 三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年一万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができます。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年六月二十五日印刷 第五十九巻 第七号  
平成二十四年七月一日発行 定価 六百円

### 編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘  
平松 裕子・山口 千恵子

### 発行人 発行所

今泉 由利  
三河アラギ会

三河アラギ発行所 千四四一〇〇二二  
豊川市 御津町 御馬 西 三 七  
TEL (〇五三三) 七五二〇〇九  
振替口座 〇〇八三〇一六 五六三三九  
E-mail yur188@cronos.ocn.ne.jp

URL  
Homepage <http://maizumityuri.jp/>  
印刷所 株式会社 桜創美